

第7回 宗門教学会議 開催報告（後半）

宗教者はどのような発信をすべきか

二〇一八年十二月十一日、第七回宗門教学会議が開催されました。

今回のテーマは、「宗教者はどのような発信をすべきか」です。

ご門主さまは、法統継承式に際して、「今日の社会状況において、今までと同じように教えを次世代へと伝えることが困難になつていま
す。また、仏教や浄土真宗の教え、親鸞聖人に対する関心はあつても、お寺との縁がない方も多くおられます。多くの方にお寺へお参りいただけるような取り組み、教えを伝えていく工夫が必要です」と述べられています。

宗門教学会議は、宗門内外から提起される現代的課題や問題について、先見的知見を有する有識者から「提言」をいただき、宗教者の持つ知見が現代社会において、どのような位置にあり、よりよい社会の創造のためにいかなる役割を果たし得るか、宗門の確たる方向性を考えていく会議と位置づけられています。そこで、現代においてみ教えを伝えていくことが困難となつてきている中で、今後どのようにみ教えを伝えていけばいいのかという、重要、かつ喫緊の課題を議論するため、本年度の宗門教学会議を開催するに至りました。

第七回宗門教学会議では、会議委員として大和証券株式会社の佐藤泰之氏、滋賀医科大学名誉教授の早島理氏、武藏野大学名誉教授の田中ケネス氏、勧学寮頭の徳永一道氏をお招きしました。座長は浄土真宗本願寺派総合研究所長丘山願海、司会は浄土真宗本願寺派総合研究所副所長の満井秀城が務めました。

なお、今号では全体討議をご報告します。

○満井 本日のテーマ「宗教者はどのよう

な発信をすべきか」の中、「どのように発信を」に焦点を当てますと、発信内容をどのようにすべきであるかが課題になります。同時に、ＩＴ社会といわれるインターネット社会において、有効な発信のツールはいかにあるべきか。こういう二点が想定されます。

発信の内容について、本願念佛のご法義は、時代や社会が変化しても変わるることはあります。が、ご法義の伝え方は、その変化につれて変わつていかねばならないでしよう。

親鸞聖人の時代と今の時代とを比べてみたときに、まず決定的に違うのは、「生死出づべき道」が課題になりにくいためではないかと感じています。そういう中には、真宗のご法義、仏教の教えをどのようにして伝えれば、ここに響くのかということになります。

こういった観点で先生方にご意見を賜りたいと思うのですが、まず田中先生は海外での伝道、あるいは教育に豊富

な経験をお持ちですが、海外、特に欧米では、自己肯定が文化土壤の基本のよう

に思っています。これに対し真宗の法義、例えば罪悪深重の凡夫といったような機の深信、あるいは、自力無効といった他力の法義、こういったことをどのようにお伝えすれば受け入れやすい、ころに響くのだろうかということについて、ご苦労と工夫といったあたりをご提言いただけますでしょうか。

○田中 「浄土真宗に関する実態把握調査」に基づけば、救い・信仰・真実を求める人は、たった十%です。このことを前提に置かないといけないと思います。こうしたことは、今だけではなくて、昔も比較的そうだったと思います。

○満井 先生がご提言いただいた、求められる在り方についての五つの要素（連続性・一体性・平和・調和・落ち着き）を見据えながら、それを真宗的に組み立てていくというのが、今後の在り方として現を強調していけば人は向いてくれると思うのですね。

○満井 目覚めの宗教というふうにご提言いただきて、全体的な趨勢はそうだと思いますが、死ぬまで罪惡生死の凡夫だという凡夫性と、信心獲得の上か

と、これは二種深信の法の深信として考えられると思うのですね。浄土真宗の本願のはたらきというのは、われわれの連帶性というか、支えられている縁起のはたらきとして捉えていくと、つながりや

一体性ということにつながつていくのではないかと思うのですね。

また、現代において信心というのは、阿弥陀さまにいただくという表現はもちろん間違いではありませんけれど、海外でそのような表現を取ると、ではキリスト教とどう違うのかというような問題が出てくるのです。そこで、現代の宗教のパラダイムシフト（構造内容）の中で、「目覚める宗教」に移行していくことを前提とすると、親鸞聖人の智慧という表現を強調していけば人は向いてくれると思うのですね。



付いたことがおありでしたら、提案いた
だきたいと思います。

○德永 私は、京都女子大学で三十三年
教えました。京都女子大学は必修科目と
して仏教学を受講させていますが、はじ
めは聞いてくれません。それをなんとか
して聞かせるということを三十三年やつ
てきました。

○田中 らどこが変わったのかといつたような問題
があると思いますが、いかがですか。

○田中 もちろん信心をいただくと變化
はあると思います。信心というのは、何
も変わらないのではなくて、やはり正
定聚の位に達するのは明らかで、精神
的にも、心的にも変化の自覚はあると思
います。現代人には、自分が自覚する面
があることに説得力があると思います。

○満井 睞頭和上も、『聖典』の英訳化
に長い間携わってこられまして、それに
あたってご苦労くださつた」と、あるいは
は工夫してくださいつていることなど、気
ね。

○満井 お寺でも同じではないですか。お寺に
関係者との交流をご提案くださいまし
た。しかし、宗教の論理と医学の論理と
いうことについては、方法論的にも違う
部分があると思いますが、どんなかたち

もう一つの経験としては、ハーバード
大学の神学部に五回ぐらい行きました。
その内の一回は一学期から、「Shin Bud-
dhism」というタイトルの講義を担当し
ました。浄土真宗は英語で「Shin Bud-
dhism」といって、「Shin Bud-
dhism」というのは、Shintoismのことか」と質問されました。Shintoismとは「神道」
のことです。浄土真宗がいかに認知され
ていなかということです。

田中先生がお話をときには引き合いに出
された『ニューヨーク・タイムズ』の一
面を使って出たエッセイがあります。二
人の学者が親鸞思想について書いてくれ
ています。このことは、いかに現代にと
って親鸞思想に意味があるかということ
を示しています。ところが、このエッセ
ーを見た方の中で「行信論がない」という
批判をする方がありました。しかし、ア
メリカの学者が書いた文章の中に伝統宗
教でいわれるような行信論があると思わ
れますか。行信論が閑所となつて、入口
を狭くしているんじやないかと思うので
す。親鸞思想について言及するならば、
伝統的な学説を踏まえて言及していなけ
ればならない。このような認識だけなら
ば、変えていく必要があると思います
ね。

○満井 早島先生は、仏教関係者と医療
聴聞に来る人だけ、浄土真宗のことを
わかっている人だけが対象で、その逆の
方向は成り立っていないということです
ね。

で連携すればいいのでしょうか。

○早島 基本的には、医師にできることと、あるいは、医師だけができることと、医師でもできないこと、僧侶にできることと、僧侶でもできないこと、とう、ある種の役割分担だらうと思います。

○満井 最初の共通テーマへ戻って、仏教学者として、あるいは大乗仏教の可能性として、こんなことが今まで伝えられ

なかつた、伝わつていなかつた、といつた部分でお気付きの点があればお願ひいたします。

○早島 京都大学のサル学の先生方と話す機会があつたときに、サルと人間がどう違うかということを説明してもらつた中で、人間だけが絶望と希望を持ち得るという話が記憶に残っています。絶望と希望を持ち得るのは人間だけであるといふときには、重要なのは絶望をどのように希望へと転換できるか。希望だけを言つても、絶望だけを言つても何も生まれない。人間だけが持つてゐるその両面を見

据えた上で、絶望から希望に転換し得るという、その部分をどうやつて伝えるのか、ということでしょうか。

○丘山 大乗仏教の可能性ということでは、「生死を超える」という言い方があります。そのとき、私は生死を超えて、人とともにとすることが、どこか根本的にあるのではないかというふうに思つてゐるんです。

○田中 アメリカで瞑想がなぜ魅力的かというと、瞑想は個人的な営みだけど、それを通してつながりを発見するんです。マインドフルネス瞑想が今流行つて



いますが、マインドフルネス瞑想には、他のつながりという瞑想法もあるんですね。初期仏教經典の『四念處經』に説かれる四無量心がありますよね。四無量心は、個人にとどまるのではなくて、やはり他者とのつながり、他者への思いやりを養成する瞑想法なのです。

○早島 お念佛を通していのちの大切さに気付くという、その気付き方とは、人間は一人では生きていけない、ありとあらゆるもののおかげで生きている、つまり生かされているという、そこに気付かない、いのちの大切さに気付いたとは言えないだろうと思います。

その生かされているとは、世俗の中では、世俗のありとあらゆるものに生かされてゐるのですが、実は世俗のいのちの在り方は、もっと大きな力に支えられてゐることに気付く、その時点で初めて、自分では輝けないのちが無量の光によつて輝かされているという気付きになるのかなと思います。そういう意味で、お念佛の世界も、縁起そのものの世界に他

ならないと考えています。

○満井 佐藤先生のご提言は、データを基にして、客観的に可視化できる課題を提示してくださったものであって、可能性とともに危険性も併せてお示しくださいました。そこで、どのようなメッセージが人々のこころに響いていくのかについて、ご助言をいただけますでしょう。

○佐藤 全般的に宗教法人が行っているつしやる情報伝達というのは、ある一定のレベル以上の方々に向けたものになつているのかなということが感じられます。浄土真宗本願寺派とご縁のない方に対するは、どのような情報が必要なのかということを少し考えていただけるといいのかなと思います。「伝える」と「伝わる」という側面があります。「伝わる」を意識しないと、特に若い世代の方が仏教に関心を持ち、浄土真宗の基礎的なことを知りたいといったときに、相手については難しく理解しづらい情報しか提供できず、結果的に「伝わらない、わから

ない」今まで終わることが懸念されますが。レベル感に合わせた情報提供を行うことが必要です。

また、今回の調査結果では、法話を聞くべきだといいう方が多いことがデータ上に表れています。浄土真宗の各宗は他宗に比べて、法話を多く行っていると言われる中で、このような回答が高い比率になつているということは、浄土真宗のお寺では法話を行つていているということを門徒の皆さまや一般の方に意識されていない、すなわち情報発信していることすら気付いていないことを示す一つの根拠になります。まずは、気付かせ意識させることが重要です。

○藤丸 テーマの内容は、何を、どのよう伝えれるかということでしたが、両方に関連するものとして重要な要素が出てきたかなと思います。私は大学の授業で、仏教の熟語を漢字で書かせて仏教がどれほど認知されているかを調べているのですが、ご縁という言葉を書かせるんですが、ご縁という言葉を書かせるところへ意識を広めた関係の中で考えなくてはいけないのかと思いました。

そこで、早島先生に一つ質問です。個別に対応していくことが大切だというご議論をしていただいたと思うんですけども、そのときに、私たちが阿弥陀仏のご縁とか、結果的にいろんなご縁を伝えてきたということが、例えば悩んでい

に今なっています。

しかし、今日お話をお聞きしていると、人間関係が一番問題になつていると、ることは、やはりご縁の問題だと思いません。佐藤先生のご発表の中では、真宗十派だと、例えば家族に相談できるとか、関係づくりが大切であるという数字が高く出ているということは、ご縁的な要素を育んできたところがあるかなと思います。

私たち、阿弥陀仏とのご縁の中でどう教えをいただいているわけですから、そのあたりのことで何を伝えるかというのも、まさしく個人の問題ではなくて、「われわれ」とか「十方衆生」というところへ意識を広めた関係の中で考えなくてはいけないのかと思いました。

そこで、早島先生に一つ質問です。個別に対応していくことが大切だというご議論をしていただいたと思うんですけども、そのときに、私たちが阿弥陀仏のご縁とか、結果的にいろんなご縁を伝えてきたということが、例えば悩んでい

る方に関わっていくと、どうにか何らかの影響を持ち得るのでしょうか。

○早島 広島で公開講座を開催したときに、看護師さんから傾聴活動というの自分たちもしていると言われた後に、「お坊さんにしかできない傾聴活動は何ですか」と聞かれて、絶句してしまった経験があります。僧侶だからできる、僧侶にしかできない傾聴活動という視点は、私はその時に指摘されるまで考えたことがなかつたのです。

今、テーマに戻りますと、僧侶だからできる対応というのは、表面には直接的に出ないかもしれません、いわば僧侶としてずっと蓄えてきたものが、具体的な傾聴活動だつたり、具体的な話の仕方だつたりといふところに出てくる。出てくるところは非常に個別的なのですが、個別的なものを支えているのは実は、真宗教義の深い受け止めや、仏教思想の根本的な理解であると思います。

われわれは、常日頃から、こういう対応の仕方でいいのか、こういう説明の仕

方でいいのかということを絶えず問い合わせる必要があります。問い合わせるとは、お念仏の受け止め方を含め自分の生き方はこれでいいのだろうかということを常に自分に問い合わせることであり、そのことを絶え間なく積み上げていくしかないのではないかなど思います。

○満井 最後に三人の先生方から一言ずつメッセージを私たちにお寄せいただければありがたいと思います。

○田中 今日、本庶佑先生がノーベル賞を受賞したニュースを見ました。その時、先生の成功の理由について執着心だと言つていました。私は、仏教でネガティブな言葉が、いい言葉として使われていてびっくりしました。しかし、「往生した」「諦めた」とか、仏教のいい言葉が悪い言葉に変わつてもいます。ということは、現代は、日常で使われている仏教の言葉が本来どういう意味を持つかということを発信するチャンスでもあるかなと 思います。

○早島 医療と仏教のつながりに絞つて



言うと、医師だからできること、医師でもできないこと、僧侶だからできること、僧侶でもできないことはたくさんあります。ですから僧侶だけが、お寺だけが抱え込んでやろうというのではなくて、できるだけ外へ出掛けていって、いろんな職種の人と個々のテーマで話し合つて、誰かに任せて丸投げにするのではなくて、一緒に活動することが大切ではないでしょうか。

○佐藤 ホームページの話を中心に情報発信のことをご説明をさせていただきま

しません。インターネット、書籍、新聞など、これらは情報を伝えるための、ただの媒体、手段でしかありません。情報伝えるのは、皆さま僧侶の大切な役割になります。

ホームページをはじめとした様々な媒体からの情報発信を受けて仏教に高い関心を持った方は、実際にお寺を訪問し

て、自分自身そのお寺や僧侶を確かめるという行動を取ると思います。そのときに僧侶の方がみ教えに導いていけるのか、すなわち情報を正しく伝えることができるかということは非常に大事な要素になります。

そうしたことを考えた際、浄土真宗本願寺派が取り組まれております「僧侶の

質向上すること」というのは、真宗門徒の「信仰をしていてよかつた」という回答、すなわち浄土真宗のみ教えが「伝わった」とことと深く関連しているといえます。浄土真宗を信仰していくよかつたと思われることは、皆さまにとつて非常に素晴らしいことではないかと考えます。

閉会 座長あいさつ

総合研究所 所長

丘山願海氏

本日は先生方、ありがとうございます。ま

な一員である。そういう意味で、僧侶は、もう少し役に立ちたいなと思っています。

それから、もう一つは僧侶の定義といふことで、僧侶育成体系プロジェクトの方からも「報告していますけれども、やはり僧侶というのは常に自分の生き方を問い合わせながら生きていくものであります。やはり現実に生きるときは、私自身が生きる」とをしながら、そこでしか共感できないのではないか。私たちはもう平氣だから、あなた方に寄

す。

実は今年、城陽の「特別養護老人ホーム ビハーラ本願寺」に初めて行きました。そこでは、一つの課題、例えば認知症に向き合うときも、医者が全て解決できるわけではない。では僧侶

り添うべだとこへのじよなべて、共に
生める」とを聞け続ける。やはり私た
ちは現実の中で悩みながら、悲しみな
がる共に生きてこねただといへるが
大事だと思つます。

先日、秋の法要に際し、♪門井わま
が「私たちのちかこ」を示して下され
が「私たちのちかこ」を示して下され

いました。♪発題の田中先生が
「Golden Chain」を♪紹介して下さ
るゝもしだが、「Golden Chain」と
「私たちのちかこ」の両方を見出べな
がる、何となく似てこねどこの印象を
持つました。また、実際にわかるもれ
な言葉で♪門井わまは示されてこな。

私たちも、実践していかなければい
けない。その見本を♪門主さまは示
してくださつてゐる。それが「私た
ちのちかこ」なんだといへるゝと思
います。
今田は先生方、本当にありますか
うございました。